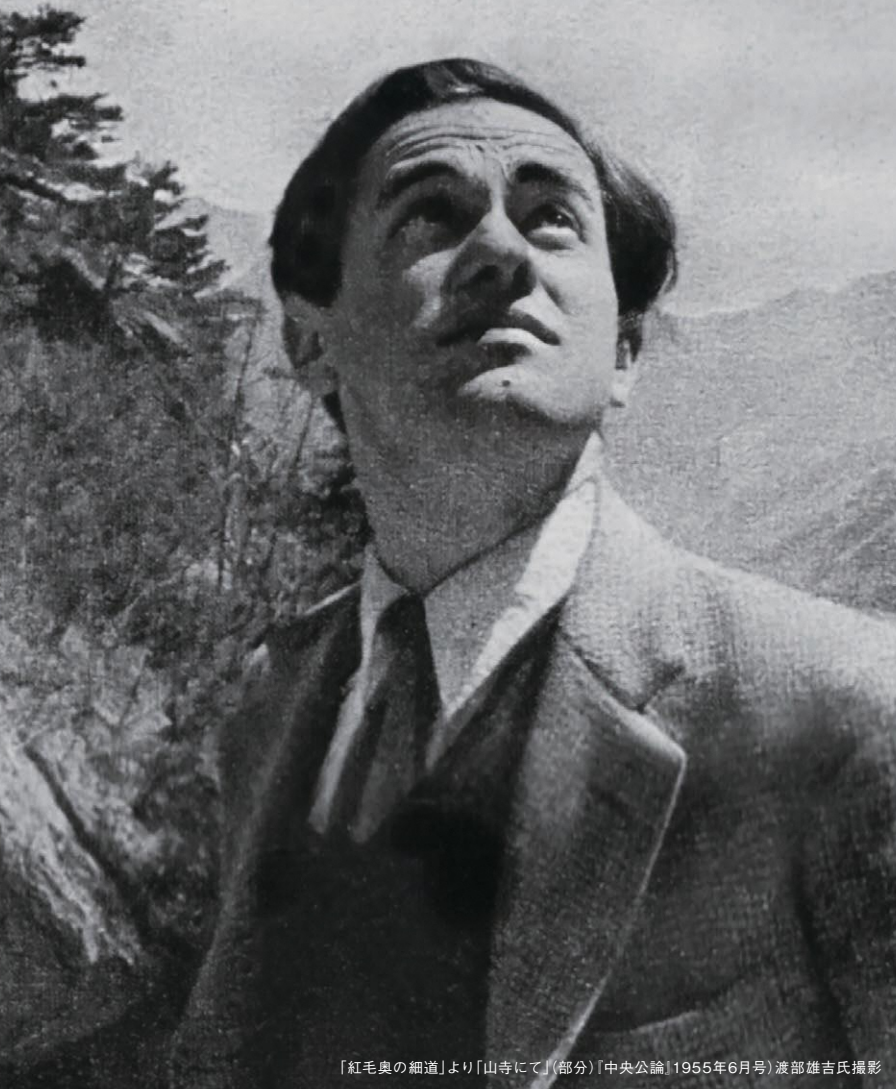


# GET TO KNOW MORE ABOUT DONALD KEENE!

YOUNG SCHOLAR DONALD KEENE  
TRAVELS ALONG 'THE NARROW ROAD TO OKU'.  
'MODERN JAPAN' IN 1958 AS SEEN  
BY DONALD KEENE.



「紅毛奥の細道」より「山寺にて」(部分)「中央公論」1955年6月号)渡部雄吉氏撮影

前期

2024.2.6 火 > 3.10 日

後期

2024.3.12 火 > 4.14 日

会場 北区飛鳥山博物館3階

開館時間 10:00~17:00 休館日 毎週月曜(2月12日を除く)

JR京浜東北線 王子駅南口から徒歩5分 / 東京メトロ南北線 西ヶ原駅から徒歩7分 /  
東京さくらトラム 飛鳥山停留場から徒歩4分 / 都バス 草64・王40・王55系統 飛鳥山停留所から徒歩5分 /  
北区コミュニティバス 飛鳥山公園停留所から徒歩3分 ※飛鳥山公園に隣接して、有料の駐車場がございます。

主催:東京都北区 協力:キーン誠己氏 (一財)ドナルド・キーン記念財団 国際交流基金ライブラリー

# もつと ドナルド・キーンを 知りたいたい!

ドナルド・キーン記念事業展示

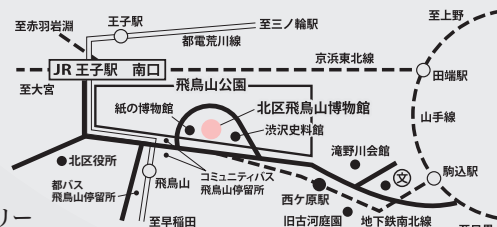
後期

『ドナルド・キーンが見た1958年の「現代日本」』

前期

『若きドナルド・キーン、「おくのほそ道」をたどる』

入場無料



# もっと ドナルド・キーンを 知りたい!

ほぼ、1世紀に及ぶドナルド・キーン先生の生涯は、ひとすじの日本文化探求の歩みでありました。今回の展示は、1948年のケンブリッジ大学講師時代の日本文学研究を出発点として、初めての日本留学を挟んでコロンビア大学に奉職するまでの1950年代末に至る時期を対象に、古典と現代、文化の持続と変容に関するドナルド・キーン先生の研究の足跡を振り返る催しです。

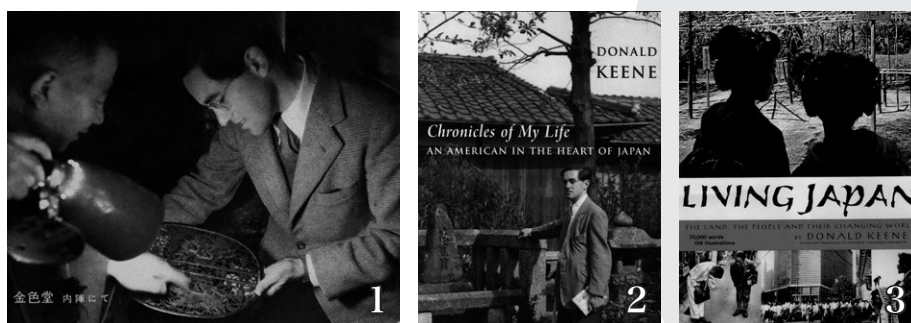
「紅毛奥の細道」(『中央公論』昭和30年6月号)とは、永井道雄京都大学助教授(当時)とともに終生の友人となった嶋中鵬二中央公論社社長(当時)による原稿依頼を受けて、執筆されたものです。前期の展示では、同書を通じて青年ドナルド・キーン先生の文学観と、日本社会との関わりについてご紹介いたします。

また、伝統的な日本文化への関心のみならずキーン先生は、急速に変貌と遂げた戦後日本社会に対しても深い関心を抱きました。1958年、ニューヨークの出版社から依頼を受けたキーン先生は、日本社会のルポルタージュ:『生きている日本(原題:Living Japan)』を翌年出版しました。同書は永井道雄との交流と指摘の中から著されたものです。日本文学成立の母体となった日本社会全体に関する多面的な言説とともに、魅力的な写真に満ちたものとなっています。

後期の展示では、『紅毛奥の細道』と、ほぼ同時期に書かれた日本社会紹介の書である『生きている日本』を中心に、ドナルド・キーンの見た日本社会への鋭い観察と独創的な知見についてご紹介いたします。

展示実施にあたり、キーン誠己様、一般社団法人ドナルド・キーン財団様、国際協力基金ライブラリー様から多大なるご理解とご支援を賜りました。厚く感謝申し上げます。

東京都北区



- 1:「紅毛奥の細道」より「金色堂 内陣にて」『中央公論』1955年6月号)渡部雄吉氏撮影
- 2: *Chronicles of My Life: An American in the Heart of Japan*. (Donald Keene Columbia Univ. Press, 2008)  
「芭蕉の墓のある義仲寺を詣でるドナルド・キーン先生」
- 3: *Living Japan* (Donald Keene Doubleday, 1959)

※キーン先生のご著作「紅毛奥の細道」の表記について

ドナルド・キーン先生が「紅毛奥の細道」を執筆された1955年当時は、『奥の細道』の表記が一般的でした。しかし現在、西村本の題簽(外題)「おくのほそ道」が芭蕉自筆とされており、これは松尾芭蕉公認の最終形態とされています。このことにより教科書等では、「奥の細道」を「おくのほそ道」と表記されています。